

酒とホンの日々

〒261-0003 千葉県美浜区高浜 2-1-16 TEL 043(204)1582 FAX 043(204)1584
URL city.chiba.jp/hws/kokoronokenko/

アルコールとうつと自死

- ・アルコールとうつ、自死にはつながりがあります。
- ・アルコールは不眠症を悪化させます。アルコールの依存性は睡眠薬の依存性よりはるかに強力です。
- ・アルコールはうつ病を悪化させます。酔っている間は気持ちが多少和らいだ気がしても、酔いから覚めた後には、前よりも気分の落ち込みが悪化します。
- ・アルコールは思考の幅を狭め、自暴自棄な結論を導き出しやすくさせます。悩みを抱えている時に、飲みながら物事を考えるのはとても危険なことです。
- ・アルコールの酔いは自死を引き寄せます。一日、日本酒換算で2合半以上の飲酒は自死のリスクを高めることが知られています。

参考：自殺予防総合対策センター作成パンフレット「のめば、のまれる」

アルコール依存と文学

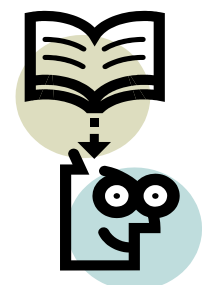
アルコール依存の人物が登場する小説や、作者自身がアルコール依存である本は、洋の東西を問わず、たくさんあります。それらの本を「アル中本」と名付けて、アルコール依存体験者の目で批評し、千葉県断酒連合会会報「新生 房総」に連載している方がいます。

「アル中本を読もう！」と題されたその連載は、書評としてもおもしろく、アルコール依存を正しく理解する上でも役立ちます。アルコール依存を正しく理解することは、うつや自死の対策にもなります。

そこで、作者（須之内美奈子氏）の許可を得て、このセンターたよりで「アル中本を読もう！」を紹介させていただくことにしました。多くの方にご一読いただき、アルコール依存という病について正しく知ってもらいたいと願っています。

断酒会等連絡先

- | | | |
|---------------------|------|----------------|
| ○千葉断酒新生会 | 竹下様方 | ☎043-271-6396 |
| ○千葉県断酒会 | 阿井様方 | ☎090-1207-2735 |
| ○つくし（ちば断酒友の会） | 増田様方 | ☎043-271-3429 |
| ○AA（関東甲信越セントラルオフィス） | | ☎03-5957-3506 |
- 当センターでも専門医によるアルコール相談を実施しています。予約制 ☎043-204-1582



アル中本を読もう！

～めくるめくアル中本の世界～

須之内 美奈子

まえがき

「アル中本」を読もう！ —— 眠剤がわりに「アル中本」 ——3

「アル中本」を読もう！ —— 酒と作家、この相性の良さがまた ——4

「房総」連載編

第1回 「今夜、すべてのバーで」 著者 中島らも5

第2回 「死神」(短編集「死神」より) 著者 篠田節子6

第3回 「流さるる石のごとく」 著者 渡辺容子7

第4回 「夜消える」(短編集「夜消える」より) 著者 藤沢周平8

第5回 「笑窪」(短編集「古惑仔(チンピラ)」より) 著者 馳星周9

第6回 「ホームレス」(短編集「友がみな我よりえらく見える日は」より) 著者 上原隆10

第7回 「枯葉色グッドバイ」 著者 樋口有介11

第8回 「楽園の眠り」 著者 馳星周12

第9回 「ロデオ・ダンス・ナイト」 著者 ジェイムズ・ハイム13

第10回 「凍(い)てついた夜」 著者 リンダ・ラ・プラント14

「房総」スペシャル編

二〇〇六年新春 特大スペシャル ～さまようアル中たち～ 15

「どうしやうもない私 ——わが山頭火伝」 岩川隆著 講談社

「海も暮れきる」 吉村昭著 講談社、講談社文庫

二〇〇六年五月 房総四〇〇号記念特集 ～アル中探偵小説の世界～ 18

「八百万の死にざま」 ローレンス・ブロック著 田口俊樹訳 ハヤカワ文庫

二〇〇七年新春 アル中手記本の不覚 ～アル中、いかに生きるべきか～ 21

「アル中地獄(クライシス) アルコール依存症の不思議なデフォルメ世界(増補)」

邦山照彦著 第三書館

「描きかけの油絵」 池田倫子著 東峰書房

二〇〇八年新春 スペシャル 彼の底つき ～酔いがさめたら、うちに帰ろう～ 23

「酔いがさめたら、うちに帰ろう」 鴨志田穰著 スターツ出版

「アジアパー伝」シリーズ 西原理恵子、鴨志田穰著 講談社文庫

「毎日かあさん」各編 西原理恵子著 毎日新聞社

「アル中本」を読もう！—— 眠剤がわりに「アル中本」——

私は、アルコール中毒者。病院のカルテには「アルコール依存症」と書かれていますが、知ったことではありません。アルコール中毒者、アル中です。

人間をやめる寸前に酒をやめ、今日にいたっています。

表題は「アル中本」を読もう！ です。「アル中、本を読もう！」ではありません。でも、書いてみるとどちらでもよい気がします。

夜、眠れますか？

アルコール中毒者に睡眠障害はつきものです。飲んでいようが、やめていようが。

飲んでいる場合。酒が切れると目が覚めて、その苦しさで眠れたものではありません。もう一杯、二杯、三杯(以下略)・・・意識がなくなるまで飲みます。深夜、明け方は問いません。そんなことにはかまっていられないのです。

酒を飲まなくなったアルコール中毒者。こちらは大変です。布団も枕もあるのに酒がないのです。やっつけられません。途方にくれます。しばらくは眠剤(睡眠導入剤)のお世話になるのが一般的です。しかしながら、これにも問題があります。

酒と違って「キックが弱い」ことです。私も最初は怒りました。

「効かねーよ」

そうかといって「キックが強い」眠剤をぐつといくのも考えものです。やめるのが大変そうで、びびり、手が出せませんでした。

「本でも読もうか」

本がおもしろければ、酒のない夜もいつしか更けていく・・・

ところで本は、つまらないほうが眠くなるのではないか。この試みは失敗しました。つまらない本は読めないのです。つまらなくて眠くなるまで読めません。そこは気の短いアル中のこと。無理に読むと、怒りの毒が心身をかけめぐります。危険です。

こうして、私は、酒の代わりに活字を浴びるようになりました。

さて、あまたの本たちと出会う中、あることに気づきました。どうしても見逃せません。アル中たち、です。主役をはるアル中もいれば、洗い脇役のアル中もいます。アル中がどのように書かれているか。「そうだっ、そのとおりっ」というのもあり「いや、アル中はそんなんじゃない」というのもあり。それどころか、書いた作家本人がアル中、という本も多いのです。「アル中本」、それはアル中が描かれた作品、またはアル中が書いた作品。他人事でないだけに、読み手としての気合が違ってきます。思いのほか、奥深い世界です。

さあ、眠剤がわりに「アル中本」を読んでみませんか？

「アル中本」を読もう！ —— 酒と作家、この相性の良さがまた ——

物書きには、アル中が多い・・・ような気がします。客観的なデータはだせませんが。

「今に物書きになって一発あてて」と思いつつ無頼派作家にあこがれ、作家にはなれなかったけれども、アル中にはなれた、という人々が無数にいたことでしょう。

実は、私もそうです。

作家にはなれませんでした。才能がどうの、という前に、書いていなかったのだからなりようがなかったのです。

飲まなくなってから川柳を作りはじめました。まずつくったのが、こんな句です。

牧水 放哉 山頭火 あなたのように生きられません

無頼派、必ずしもアル中ではないでしょう。が、彼ら三人は間違いなさそうです。

また、無頼派と呼ばれるのは物書きだけでなく、他の分野の芸術家たちにも多く見うけられます。芸能人にも多いですね。

しかし、アル中と物書き。とりわけ相性が良いです。なぜか。

ひとつは、「体を使わなくてもなんとかなる」からではないでしょうか。ペンが持てて、紙に書ければなんとかなります。そこへいくと、役者は舞台にたたねばなりませんし、歌手は歌わねばなりません。美空ひばりさんは根性がありました。超人です。画家や彫刻家も、手がふるえては仕事がしにくいでしょう。

このたびアル中本を紹介するにあたり、アル中と作家について述べようとしたのですが、そう気軽にはまとめられないことに気づきました。たいへんな数の作家の作品と人生を追う必要があります。書こうとしてから気づくなよ、と後悔、ではなく反省しました。思わず「二日酔い 後悔すれども、反省せず」というすばらしいキャッチフレーズを思い出しました。

けれども、この「アル中と作家について考えてみる」という思いつきは、悪くないと思います。で、後悔はなし。でもすこしだけ、反省、と。飲んでいたときとは逆です。

まずは、アル中本を読んでみようではありませんか。

アル中本の世界は、広くて深く、海のようなです。

ゆっくり、浸かっていきたいですね。

あわてる必要もありません。

酒も、今日一日しかやめられませんから。

さて、ゆっくりと。



「アル中本」を読もう！（第1回）

眠剤が効かない夜には、アル中本でも読みませんか？

アル中が登場する小説、筆者がアル中である本を「アル中本」と名づけ、勝手に紹介させていただいています。

（今回のアル中本）

タイトル「今夜、すべてのバーで」

著者 中島らも

出版社 講談社

（あらすじ）

作家の小島容は、アル中。17年間、ウイスキーを毎日1本ずつあけて35歳で入院した。その時、γ-GTPが1300。彼は20代のころ、偶然、3人から「このままだと35歳で死ぬよ」と言われた経験をもつ。ひとりには医者、ひとりには占い師、そしてもうひとりには親友の天童寺不二雄。青春時代をともにした天童寺は20代の終わりに、酔って車にはねられて死んだ。

小島は、自分がアル中であると自覚しているが、酒をやめて生きていく自信はもてない。病院でいろいろな患者たちと出会いつつ、体は回復に向かうが、外出時、スリップ（再飲酒）する。

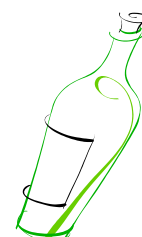
スリップした翌日、天童寺の妹であり、小島のアシスタントをしているさやかが病院にやってきた。彼女が見つけたコピー用紙の束。それは、天童寺一家に対しておこなわれた、精神科医によるセッションの記録だった。天童寺家は、不二雄とさやかの父親がアル中であり、機能不全を起こしていた。さやかは「恥ずかしい家の話だったわ。でも、これが私の生きていく道を照らしてくれることになった。後で考えればね」といって帰っていった。それを読んだ小島は……

（ひとこと）

昨年の夏、らもさんが亡くなった。「ああ、とうとう逝っちゃたか、でも、もう充分、自分の仕事をやり遂げたんだな」と思った。ちょうどアル中平均寿命52歳であったのも、見事かもしれない。しかしファンとしては、やはり惜しい。

この小説は、著者自身の体験がベースになっているようだ。作中のいろいろなエピソードは、他のエッセイや作品でも書かれている。主人公、作者ともアル中。アル中本の王道をいっている。らもさんの本にしてはめずらしく、引用や説明が多い。それだけ「アルコール依存症」という病気にこだわりをもって書かれた作品であることがわかる。そのわりには全体として軽快な印象を保っており、読後感には爽快だ。楽観的すぎる、アル中はこんなもんじゃないと、つい言いたくなってしまうのは、当のらもさんがついに本気で断酒に取り組まずに亡くなったせいかな。

- ・ スリップ防止度 ☆☆☆☆（スリップのシーンがリアル）
- ・ 飲酒欲求発生度 ☆
- ・ 総合評価 ☆☆☆☆☆



「アル中本」を読もう！（第2回）

（今回のアル中本）

タイトル「死神」（短編集「死神」より）

著者 篠田節子

出版社 文春文庫

（あらすじ）

主人公、重松寛治は、市の福祉事務所の係長。かつて市職員の労働組合の書記長までつとめた男だが、権謀術数にたけていないため追い落とされ、福祉事務所でケースワーカーを30年やっている。うち、20年はワーカーホリック（仕事中毒）として、直近10年はアル中として過ごし、ぼろ雑巾のようになっている。彼はある日、かつて深く関わりあった担当ケースである高木と再会する。約20年ぶりに会った高木も、もともとのアルコール依存症が進んでおり、死にかけていた。立場こそ違え、ともに「死神」のような有様になっているふたりだったが、重松は、高木に「ともに断酒しよう」ともちかけた。ところが、重松は断酒10日でスリップ（再飲酒）し、死線をさまよう。高木は、別れた妻子との再会を望んでのことか、病院で断酒を続けていたが……

（ひとこと）

著者の篠田氏は、実際に市役所の福祉相談員として働いた経験をもつ。アル中たちは事務所の常連さんであり、その生態についてはよくご存知だ。他の小説の中にも、ちょこちょこアル中が顔をだし、その姿は的確に描かれている。

この物語の主人公の重松は、いかにも「アル中になりがちな性格」をしている。一本気で不器用で熱血漢。やりすぎ、はまりすぎ。途中、こんな描写がある。

「やればやるほど底のない仕事だった。熱意を持てば持つほど迷いばかりが深くなり、深夜に事務所を出た後は、安酒場に足が向いた。（中略）重松には、若いケースワーカーたちの手際よさが理解できない。仕事の手際よさ、家庭生活の手際よさ、人間関係をさばく手際よさ……」

途中、引用されている短歌も、とても印象的だ。アル中本、短編の傑作だと思う。

- ・ スリップ防止度 ☆☆☆☆
- ・ 飲酒欲求発生度 ☆（主人公はもう酒の味などわからなくなっているようで、うまそうに飲むシーンはない）
- ・ 総合評価 ☆☆☆☆



「アル中本」を読もう！（第3回）

（今回のアル中本）

タイトル「流さるる石のごとく」

著者 渡辺容子

出版社 講談社文庫

（あらすじ）

速水圓(まどか)は、大富豪の娘で、夫は医者。長身で美貌。ダイヤモンドのコレクター。しかし、アルコール依存症で窃盗癖をもつ。夫に強く勧められて自助会へ出席し、妹のアルコールで悩んでいる「キャスリーン」と名乗る女性と知り合う。が、彼女は圓と会ったその日に近くのマンションの屋上から転落死してしまう。その10日後、キャスリーンの妹が圓のもとにあらわれ、アルコール依存症だったのは、キャスリーン当人だったことを知らされる。その最中「夫を誘拐した」という電話が入り、圓は夫をとりもどすために酒を断ち、必死に奔走するが……

（ひとこと）

おもしろい。誘拐事件だけでなく、いくつかほかの謎がからみあい、「どうなる、どうなる」というサスペンスものの王道をいっている。なにより、活字の世界で「女のアル中」が主人公というのがめずらしい。しかも美貌で金持ち。

小説としては充分楽しめたし、アル中の姿もなかなかリアルに描かれている。しかし、アル中の観点から少々言わせていただきたい。まず、「アル中はそんなに簡単に回復しません」ということ。あと最初にてでくる自助会「アメジスト倶楽部」の描かれ方。バリバリ飲んでいる現役アル中の目線で描かれたものだから仕方がないと思うものの、これでは自助会そのものの印象がものすごく悪くなってしまう。後でなんとかフォローしてほしいところ。アル中は自助会なくしては回復しないし、回復していく過程こそがいちばんドラマティックなのだから。

本書は、1995年江戸川乱歩賞の候補作になったが、藤原伊織の「テロリストのパラソル」に競り落とされてしまった。「テロリスト～」もアル中本だけれど、私は断然、今回紹介させていただいた本書のほうに軍配をあげる。ちなみに彼女(というのも失礼？ 渡辺氏)は次の年「左手に告げるなかれ」で、きっちり江戸川乱歩賞を受賞した。

- ・ スリップ防止度 ☆☆☆☆(ヒロインもすでに飲むのが苦しそう)
- ・ 飲酒欲求発生度 ☆☆
- ・ 総合評価 ☆☆☆



「アル中本」を読もう！（第4回）

（今回のアル中本）

タイトル「夜消える」（短編集「夜消える」より）

著者 藤沢周平

出版社 文春文庫

（あらすじ）

まだ、東京が江戸だった頃。おのぶは四十になるいい女。だが長年連れ添った亭主の兼七は飲んだくれ。奉公にでた娘のおきみも父親を恥じて家には近寄らない。兼七の酒はますますひどくなる。おのぶは愛想を尽かしながらも、もともとは腕のいい雪駄職人で気弱な兼七が、ときにあわれで見捨てることができない。娘のおきみに縁談がもちあがった。が、飲み代ほしさにおきみの奉公先に押しかけた兼七のせいで、破談になりかかる。「おとつあんなんか、死んでくれればいいんだわ」と泣く娘の言葉を聞いた兼七は……

（ひとこと）

まだ私が酒を飲んでいたら。勤め先の先輩が煙草をふかしつつ、しみじみと言った。「最近、藤沢周平の世界がよくなってねえ。オレも本当のおじさんになった。」なんと答えたか覚えていないが、私自身もう、そのときの先輩の年齢を過ぎてしまった。

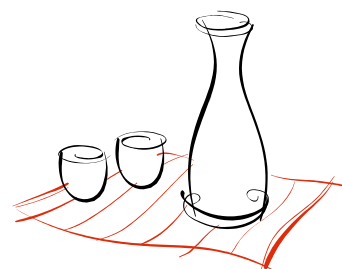
さて、このごく短い物語。すばらしい。私の偏狭な人間観をゆるがしてもらった。アル中の姿が、一文字のむだもなく描かれている。妻のおのぶは酒に取り憑かれた夫の業を、直観的に理解し、受け容れようとする。私はそこに、深い「情」を感じた。「愛」といってもいいけれど、やはり「情」だろう。じんときた場面を引用しよう。

……おのぶは、兼七の眼を見た。どことなく青光りするような眼が、おのぶを見ていた。だがそれはむかしの兼七の眼ではなかった。兼七の眼はおのぶに向けられていたが、何か遠くにあるべつのもをみているように思われた。心を通じる道が閉ざされていた。兼七が、もう常人にはもどれないのを、おのぶは感じた。そして自分の人生も、終わったとおのぶは思った。おのぶは兼七の胸を搔き寄せて抱いた。

「いま、お金を上げるからね。行ってお酒を飲んでおいで」

「共依存」なんかとは対極の、おのぶの生き方。夫を持たぬと決めた私の胸にぐさり、とくる。

- ・ スリップ防止度 ☆（兼七の身になってしまうとねえ）
- ・ 飲酒欲求発生度 ☆（でも、兼七はかわいそうだし飲まないでおこう）
- ・ 総合評価 ☆☆☆☆☆



「アル中本」を読もう！（第5回）

（今回のアル中本）

タイトル「笑窪」（短編集「古惑仔（チンピラ）」より）

著者 馳星周（はせ せいしゅう）

出版社 徳間書店

（あらすじ）

主人公、阿藤良は板前。酒とギャンブルで身を持ち崩して、大久保の居酒屋で包丁をにぎっている。店の客が連れてきた、中国は広東からの出稼ぎ娘、メグと深い仲になった。メグは闇カジノのディーラー兼娼婦である。メグと闇カジノに深入りしていく彼に待っていた運命は……

（ひとこと）

著者の馳氏は、アルコール依存症という病気について詳しいわけでもなく、さしたる興味があるわけでは無いと思う。にもかかわらず、短い小説のなかでアル中がぶっこわれていく様子をリアルに描いており、すごいと思った。主人公はあきらかに末期的アル中であり、ギャンブルにも対人関係にも問題がある。彼のもつ「自分が水槽や海の中でただよう海藻」というイメージは、アル中の意識にくり返し浮かぶイメージとして、共感できた。

馳星周氏といえば、デビュー作「不夜城」で、そのあまりの救いのなさ、暴力性、後味の悪さにびっくりさせられた。が、結局、他の作品もほとんど読んでしまった。今回、この短編を読んで、それがなぜか理解できた。

ところで、主人公の阿藤良は板前である。私も何人かのアル中の板前さんと出会った。その後、包丁をにぎる世界に復帰して、アル中から回復した人の話は聞かない。それは神業なのだ。しばらくは別の気楽な仕事をしながら自助グループに通って、何年かしてから復帰してほしい。そんな板さんがいる店なら、必ず食べに行くから。

- ・ スリップ防止度 ☆☆
- ・ 飲酒欲求発生度 ☆☆（メグの好物、「焼酎のお湯割り。梅干し入り」がうまそうだ）
- ・ 総合評価 ☆☆☆



「アル中本」を読もう！（第6回）

（今回のアル中本）

タイトル「ホームレス」（短編集「友がみな我よりえらく見える日は」より）

著者 上原隆

出版社 幻冬舎（アウトロー文庫）

（あらすじ）

竹中工務店で内装の設計をしていた片山夏樹氏（50歳）は現在ホームレス。本、雑誌拾いで日銭を稼ぎ、段ボールハウスに住まう。生活の拠点は新宿。

著者にむかって、35歳で会社を辞め、アルコール依存症となり、さらにホームレスになるまでのなりゆきを語る。

（ひとこと）

本書は、ノンフィクションの短編集だ。この短編も、著者が段ボールハウスで一泊し、雑誌を拾って金に換えるまで、片山氏につき合い、それをルポしたものである。

著者の上原氏は、パステルカラーでぼかしたようなやさしい目で人を見ている。しかし、アル中の目から片山氏を見ると、やはり「酒を手放さないアル中」ということがはっきりと分かってしまう。彼は、うそをついている。会社の、部下に対する不当な仕打ちに怒りを覚えて、上司をなぐったから会社を辞めたというのは本当かもしれないが、アル中になったのはそれが原因ではないはずだ。40歳での自分の浮気が理由で離婚し妻子と別れた、というのも本当かもしれないが、原因は浮気だけではないはずだ。一人暮らしになってから福祉課の人に助けられて依存症を克服した、というのも嘘だ。アパートに友だちが立ち寄って酒を飲みに来るから、という理由で引越しを繰り返し、とうとうアパートに住む金が尽きたからホームレスになったというのも、言い訳だろう。実際、所持金2万円をもって最後のアパートをでた足で、酒を飲んでいる。

著者は「アル中」を理解していない。が、片山氏の人間性は的確にとらえている。見方がやさしすぎるくらいはあるけれども、片山氏は事実、やさしすぎる人なのだと思う。

この話は、こんな一文で終わる。著者は一箱のタバコを片山氏に進呈する。すると、片山氏は一本ぬいて深々と吸ったあと、「彼はタバコの箱を自分のポケットにしまわずに、彼と私のちょうど中間の位置に置いた。」この描写が秀逸だ。

- ・ スリッ防止度 ☆☆☆☆（ホームレス生活は、とても大変そうだ）
- ・ 飲酒欲求発生度 ☆（同上）
- ・ 総合評価 ☆☆☆



「アル中本」を読もう！（第7回）

（今回のアル中本）

タイトル 枯葉色グッドバイ

著者 樋口有介

出版社 文藝春秋

（あらすじ）

東京都内のマンションで親子3人が惨殺された。事件から半年が過ぎ、吹石夕子巡査部長は難航する捜査に歯噛みしている。そんな時、女子高校生が代々木公園で殺された。彼女は、親子3人殺害事件の生き残り、美亜の友人だった。2つの事件に関連があると考えた吹石は、代々木公園に出向き、ひとりのホームレスを見かけて驚く。彼は、椎葉明郎。かつて有能な刑事であり、吹石に逮捕術を教えた教官でもあった。

吹石は非公式に、いささか強引に、椎葉を捜査に協力させる。椎葉は、美亜の家には秘密があると勤を働かせ、かたくなな美亜の心を開かせる。一方で、女子高生殺しの内偵を進める中、思いもかけない事実が次々と明らかになる。捜査が進むうちに吹石は、椎葉に惹かれていくが……

（ひとこと）

殺人事件、家庭の秘密、女子高生売春、ホームレス。暗く、重い材料の割には、タイトルにある「枯葉色」にふさわしく洪くて淡い筆致で描かれている。好感のもてる一冊だ。

椎葉はアル中であり、ふとこころに焼酎をしのばせてはいるものの、一向にアル中らしくない。ひとつはアル中としての肉体的、精神的な苦しみが描かれていないから。もうひとつは、頭と体の働きが正気な人間のそれとして描かれているから。そう、リアリティに欠けるのだ。本物はもっと悲しくて汚くてだらしなくて情けないから。まあ、彼の場合ホームレス歴、アル中歴ともに1年なので、まだ進行してないという見方もできよう。そんな見方ができるのは、同じアル中だけだろうけど。

椎葉と吹石のキャラクターは、ともに好ましい。椎葉はやさしくてフェミニストだし、28歳独身の吹石夕子は仕事に一途で、意地っ張りで不器用だ。

ラストシーンでは椎葉に向かって「酒、やめなさい。あなたならできる。一緒にやろう！」と言いたくなってしまった。ああ、どんな本も「アル中の視点」から読んでしまうなあ。

- ・ スリップ防止度 ☆
- ・ 飲酒欲求発生度 ☆☆☆☆（焼酎党の方、ご注意を）
- ・ 総合評価 ☆☆



「アル中本」を読もう！（第8回）

（今回のアル中本）

タイトル 楽園の眠り

著者 馳星周

出版社 徳間書店

（あらすじ）

登場人物は、親から虐待されて育った高校生、妙子。そして、妻に去られ、幼い我が子を虐待している現職の刑事、友定伸。恋人に暴行され、流産して入れられた病院から脱走した妙子は、偶然、伸の息子と出会い、虐待されていることに気づく。彼女は瞬時に「この子を救って、この子の母親になろう」と決意する。子どもに「紫音（しおん）」という新しい名前を付け、伸の執拗な追跡を逃れようと、東京中を必死にさまよう。その最中、ヒデという協力者を得るが、一方、伸も奈緒子という協力者を得る。奈緒子も自分の子どもの虐待を止められず苦しんでいた。携帯電話、メールを駆使しての息詰まる追跡、逃亡劇。この痛みと苦しみに満ちた人々が繰り広げたドラマの幕はどのように下ろされるのか。

（ひとこと）

今回の本には、アル中は登場しない。しかし、コントロール不能な何かに執りつかれ、やめられず、とまらず、理解されず、苦しみ、のたうつありさまは、アルコールに打ちのめされた私たちの経験とシンクロするのではないだろうか。暴力も嗜癖なのだ。

この作者は、いつも小気味がいいほど救いのない結末で驚かせてくれるが、今回に限ってはひょっとして・・・と思わせておいて、やはり「ここまでやるか」という結末にしてくれた。そこが、さすが、なのだと思う。幼児虐待という底知れぬ嗜癖にとらわれた者の物語。安直な救いもたらされても困るのだ。アル中をはじめ、中毒者、嗜癖者が登場する小説や映画は数多い。だが、希望をもたせる結末には、案外、がっかりさせられることが多い。そう簡単にいくものか、と思う。

それにしても、この物語。虐待するほうもされるほうも、ひどくあわれでやりきれない。酒にしろ、薬物にしろ、対人関係にしろ、すべての嗜癖者に、人知を超えたものの力が救いをもたらしてくれることを祈らずにはいられない。他になにができるだろう。



「アル中本」を読もう！（第9回）

（今回のアル中本）

タイトル ロデオ・ダンス・ナイト

著者 ジェイムズ・ハイム

出版社 ハヤカワ文庫

（あらすじ）

舞台はアメリカ、テキサスの田舎町。十年前に失踪した牧師の娘が白骨死体で発見された。自他ともに「有能でない」ことを認める郡保安官デューイーは事件解決のため、引退した元テキサス・レンジャーのジェレマイア・スパーに協力を求める。ガンで余命いくばくもない娘、夕食時にはすでに「ウオッカの臭いが漂ってくる」妻、生業の牧場経営の危機、家庭の問題を抱えるジェレマイアは捜査への協力を引き受けることを躊躇する。まして死にかけている娘は殺された牧師の娘と関わりがあった。しかし運命は彼にその役割を引き受けさせる。白骨死体の発見と同時に一組の親子が惨殺される強盗事件が発生。また、捜査していく中で明らかになった何者かによる町の複数の有力者への強請。平和と思われていた町は大騒動となる。ジェレマイアをはじめ、人種差別に苦しむ黒人の保安官助手のクライドや、その恋人で白人の郡地方検事ソーニャの必死の捜査により大騒動はひとつひとつ収束していく。ジェレマイア自身も事件に挑みながら、家庭の問題にも正面から向き合っていく……

（ひとこと）

主人公ジェレマイアにしびれた。折に触れて「どうにもならないことだ」とつぶやきながら厳しい現実を耐え、受け入れる。古風で、強くて無骨ないい男。とくに妻に対する思いが泣かせる。最後のほうで妻のマーサに酒をやめるように言うシーンがあるが、思わず「この夫なら妻に酒をやめさせることができるだろう」と思った。妻が酒を飲まずに生きていくために本当に必要なことを理解し、助けていけるのではないかと感じられた。アル中と関わる人の描かれ方に対して、このように感じられることは珍しいのではないか。

物語の舞台、テキサスはいまだ独立の気風を色濃く残した独特の土地柄だそう。おおざっぱに言えば保守的であり、人種差別や同性愛者への差別が根強く、物語のなかでもそのあたりの事情が語られている。読みながらテキサスの地に滞在したような気分になった。文庫本で六百ページと長いが面白く、あっという間に読み終わったこの本は、作者のデビュー作とのこと。シリーズとして、その後のジェレマイアとマーサを描いてほしいと願っている。



「アル中本」を読もう！（第 10 回）

（今回のアル中本）

タイトル 凍てついた夜

著者 リンダ・ラ・プラント

出版社 ハヤカワ文庫

（あらすじ）

ロレインは元ロサンゼルス市警の警部補。女性差別と戦いながら、たたき上げのキャリアを築いた優秀な警官だった。が、在職中からアルコール依存症が悪化の一途をたどる。最後は勤務中に酔っ払って十四歳の少年を誤って射殺し、解雇される。その後は、あれよあれよという間に転落。警官時代に自分が逮捕したポン引きに客を紹介してもらって売春するところまで堕ちる。警察を解雇されて六年後、轢き逃げ事故にあって九死に一生を得た彼女の状態ときたら「腫瘍、性病、性器ヘルペス、皮膚病、栄養失調と、ありとあらゆる病気をかかえ」アル中にすら見えず統合失調症の疑いありと診断されて施設に収容された。施設の職員、ロージーの助けを得て彼女の部屋に居候するようになったロレインだが、ある日傷害事件の被害にあい、そこから連続殺人事件にまきこまれる。事件を捜査する元上司に協力せざるを得なかった彼女は酒を断ち、必死に事件に立ち向かうなかで、しだいに自身の再生をめざすようになる。

（ひとこと）

とても、よかった。「ぬるい」描かれかたをされることが多い女アル中だけれども、ロレインの落ちっぷりときたら、目が覚めるようである。かろうじて酒がとまっても生きる希望がとりもどせないこと、いったん壊れてしまった社会性もどらないこと、などのアル中の悲劇的な一面もきちんと描かれている。いちばんいい点はヒロインであるロレインが恋愛やら家族の愛やらではなく「自分にふりかかったピンチ」に立ち向かうことで回復に向かう、という構造だと思う。回復の動機が依存的でないのが斬新である。読中、再飲酒もでてくれば自助グループもでてくる。アル中には興味深いネタが盛りたくさん。読後感もすっきり。文庫版についている桐野夏生さんの解説もすばらしい。

本書には続編があり「渴いた夜」「温かい夜」と続く。「渴いた夜」は品切れということで手に入らなかった。「温かい夜」も店頭にない。残念。アル中としては目が離せないシリーズだが、一般読者にはそうでもないのだろうか。

- ・ スリッ防止度 ☆☆☆（読んでる間は大丈夫）
- ・ 飲酒欲求発生度 ☆☆（著者が酒呑みではないのか魅力的な飲酒シーンはでてこない）
- ・ 総合評価 ☆☆☆☆



「アル中本」を読もう！

二〇〇六年新春 特大スペシャル ～さまようアル中たち～

(今回のアル中本)

「どうしようもない私 ——わが山頭火伝」 岩川隆著 講談社

「海も暮れきる」 吉村昭著 講談社、講談社文庫

私はいつも旅に出たかった。「どこか遠いところへ行きたい」という願望は、物心ついたときからもっていたように思う。それが、酒を飲みはじめてからとくに強くなった。「どこかへ行きたい」はげしく、せつなく、そんな思いにとりつかれたものだ。

さて、今回は、酒と旅にあけくれた種田山頭火、尾崎放哉の生涯を描いた本をとりあげてみた。ともに自由律俳句の俳人として名を残した。もちろん句も。

うしろすがたのしぐれていくか(山頭火)

分け入つても分け入つても青い山(山頭火)

入れものが無い両手で受ける(放哉)

咳をしても一人(放哉)

誰でもいちどは聞いたことがあるのではないかと思う。2人ともほぼ同じ時代に、俳誌「層雲」を中心に活躍した。山頭火が山口県防府市、放哉が鳥取市出身、ともにアル中、酒乱で、周囲に大迷惑をかけながらも俳句仲間たちに支えられて、句を残すことができた。

「どうしようもない私 ——わが山頭火伝」

力作だ。著者の岩本氏はノンフィクションライターである。本書は、数多くの文献から、まるで「見ていたように」山頭火の一生を浮き彫りにしている。読後、つくづく感じたのは「まったく、アル中の一生そのものだよなあ」ということだ。著者は、アルコール依存症という、病気そのものについては触れていない。おそらくこの病気については調べていなかったのではないだろうか。にもかかわらず、アル中特有の酒の飲み方、精神状態などを正確に描いている。プロの文筆家というのはやはりすごい。とはいえ、もしこの作品を、アル中は肉体的、精神的な、そして全人格をとりこんでしまう病気である、という視点から書いたらどうなったか。ぜひそのバージョンも読んでみたい、などとアル中の当事者である私はつい考えてしまう。

「海も暮れきる」

こちらは、尾崎放哉の後半生を描いた小説。まず、タイトルがいい。放哉は海が好きだったようで、海の句をたくさん残している。そういえば山頭火のほうは山や野の句が多い。放哉は、正業についたためしのない山頭火とは異なり、東京帝大法学部を卒業した後、勤め人としてエリートコースを歩くこと十年弱。でも

酒のせいでボシやる。そして、結核。この小説で描かれている放哉は、大酒をかつくらうというよりは、典型的な酒乱型の飲み方をしている。お金もなければ、体もぼろぼろで、そんなに飲めたものではなかったのだろう。小説の後半では酒の苦しみ、というよりは病苦の描写に、目を覆いたくなる。彼の生き方のなかで瞠目すべきは、美人でしっかりものの奥さんには甘えまいと、必死にこらえた点である。すばらしい句が残せたのは、身内に甘えず友人、隣人の善意にすがる、厳しく寂しい道を選んだからだと思う。こちらは小説なので、どうしても感情移入が強くなる。読後感が少々せつないの、気がふさいでいるときは「積ん読」したほうがいいかも。

さまようアル中たち

明治生まれの彼らにとって、アル中は結核同様の死病であるということは知るよしもなかった。彼らがひとつところに定住できず、さすらい続けたのは「心の平安を求めて」のことだったのではないかと思う。だが、それはかなわぬ願いである。アル中は、この地上どこへいっても酒を手放さないかぎりどうしようもない。死して大自然の懷に飛び込むしかない。病めるアル中を受け入れてくれる場所はそこだけである。

とはいえ、二人とも路上で行き倒れることはなかった。山頭火は愛媛県松山市の一草庵、放哉は小豆島の南郷庵という小さな庵で客死した。それは、彼らが死ぬまで句作を続けたからである。友人たちはそんな彼らを、見捨てることができなかった。

今回、山頭火、放哉に関する本を読んで、二人の残した句をたくさん読むことができた。やはり、すばらしいと思う。自由律俳句とは、まさしく彼らのためにあったようなものだ。アル中には長い文は向かない。つきつめて一句にまとめるという表現方法がもっとも適していたのではないか。というよりも、他の方法はとれなかったのではないだろうか。

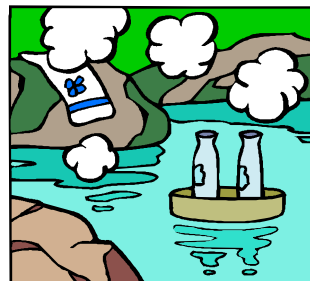
二十一世紀のアル中として

ところで、山頭火も放哉も、ひたすら旅に明け暮れたかのようなイメージがあるが、実はそうでもない。山頭火は全国を廻ったとはいえ、旅の中心は西日本である。放哉も仕事で朝鮮半島に渡ったほかは、西日本が中心で、旅の範囲は山頭火よりも狭い。彼らは友人の援助をあてにしていたので、そう遠くにはいけなかったのである。放哉には持病もあった。なにせ、アル中で、定住ができないから「ここではないどこかへ」行きたくて、旅にでていたのだろうと思う。

さて、私も旅にでたかった。飲んでいたころは、やはり「ここではないどこかへ」行きたくったのではなかったか。いろいろなところへ旅したが、心のどこかで、どこへ行っても自分からは逃げられないということは、わかっていたような気がする。飲まない生き方を選んだ今、どう変わったか。あまり変わらない。やはり「ここではないどこかへ」行きたいのである。唯ひとつ変わったことは「ここ」も愛している、ということだ。「ここ」とは、今、この瞬間を生きている自分自身である。自分自身が嫌だ、逃げたいという、あの、焼けつくような衝動がなくなった。

二十一世紀のアル中は、おのれにとりついた死病から回復する道を選ぶことができる。私は回復への道を歩きたい。それこそ偉大な旅だろう。そして、この世界のなかで、自分が自分らしく有意義な生き方ができる道を探したい。一日一日を大切に生きれば必ず見つかるだろうと信じている。

それにしても「漂泊の思ひやまず」「そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。」(by 松尾芭蕉)ということは、よくある。旅にでたいなあ。



酔いざめ川柳

須之内美奈子

【春】初春や 飲まずに生きて これくらい

花見なら 梅がいいかな お茶が合う

テキーラとラムと名付けて 窓の猫

【夏】それならば 化けて出ようか ビヤホール

遠雷に 酒 懐かしむ 響きあり

【秋】あばら家も おやしき 豪邸も よく踏ん張って あらしすぎ 台風一過

隣席の ワインの残り 気がしれず

逝くならば こんな小春日和の 朝十時

【冬】あつあつの おでんも 今やおかずなり

酒税なら 払いすぎたと 後悔し

「アル中本」を読もう！

二〇〇六年五月 房総四〇〇号記念特集 ～アル中探偵小説の世界～

(今回のアル中本)

「八百万の死にざま」 ローレンス・ブロック著 田口俊樹訳 ハヤカワ文庫

(あらすじ)

主人公のマット・スカダーは、アル中。彼は元警察官で、今は、ライセンスなしの私立探偵をしている。AA(アルコールクス・アノニマス)には顔を出しているものの、酒を本当に止めようとは思っていない。

病院を退院してから九日か十日たったその日、彼に仕事の依頼が入った。コールガールのキムが、その稼業から足を洗いたいので、ヒモと話を付けてほしいという。そのヒモ、チャンスは、あっさりキムを手放すことを承知した。ところが、その直後、キムは何者かによって惨殺されてしまう。容疑をかけられたチャンスは、マットに犯人探しを依頼するが……

アル中のドラマ

アルコール中毒者の体験談はおもしろい。性別、年齢、職業、頭のよしあし、学のあるなしは関係ない。ただし、本人の腹から出たほんとうの話に限る。数分間の語りの中から、琴線に触れる、心を揺さぶるドラマが繰りだされることが、ま、ある。

今回のアル中本「八百万の死にざま」は、アル中の物語だ。物語は、主人公が断酒して十日前後のところからはじまる。酒との格闘、スリッパ(再飲酒)。また、断酒。くどくなく、淡泊すぎず、よく描かれていると思う。ところどころに出てくる、AAのミーティングの情景も印象的だ。だが、出色なのはラストシーン。アル中でない翻訳者、田口氏でさえ、「……なにやらもう自分が訳者なのか作者なのか主人公なのか見さかいかつかなくなり、目がしらがじいと熱くなって、思うように字が書けなくなったのを覚えている」(訳者あとがきより)と述べておられる。主人公、マットが飲まない生き方の第一歩を踏み出す瞬間を、わたしたちアル中は深い共感をもって祝福することができるだろう。

世界ただひとり 断酒探偵のこれから

マット・スカダーシリーズは、これまで、十五作が翻訳されている。本書は、第五作目。本書以前のスカダーは、ばりばり飲んでいる。ご覧あれ。酒はなんでも飲むようだけれど、特徴的なのは「コーヒーにバーボンを注ぐ」飲み方。うまいのか？ そんなの。試してみたいけれども、そうもいかない。

本書以後、スカダーの一日断酒(?)は続き、私の知るかぎり、十三作目まで飲んでいない。作者が「ここでそろそろ飲ましてみようかねえ……」などと考えないことを祈る。世にさまざまな探偵小説があり、アル中探偵というのも数多く登場する。が、回復者として活躍しているのは、今のところ、マット・スカダーただひとりようだ。

それでは、他のアル中たちは、どうか。

傑作アル中本アラカルト

傑作のひとつが、「深夜プラス1(ワン)」。登場する凄腕のプロのガンマンがアル中である。冒険につぐ冒険の中、ガンマンであるハーヴェイがアル中であることが物語上の大切なポイントになっている。冒険小説としても名作に違いないだろうけれど、アル中本としても傑作だ。それにしてもこの本は一九六五年に発表されている。当時、海の向こうでは、すでに「病気としてのアル中」が認知されていたのかと思うとうらやましい。

続いてチャンドラーの「長いお別れ」。今回、あらためて読み直し「おもしろいよなあ、これ」と思った。テリーのキャラクターが、のちの多くのアル中本に与えた影響は大きいのではないかと、とひそかに、にらんでいる。チャンドラー自身、晩年、大量の飲酒で寿命を縮めたらしい。ということは、やはり彼も・・・

また、日本人に好まれるのではないかと思うのが、カート・キャノン「酔いどれ探偵街に行く」。あと、ジェイムズ・クラムリーが作り出した探偵ミロと、C・Wスルー。いずれもアメリカ人とは思えないほどウエットな性格だ。私がいうのもなんだが、彼らのよく飲むこと飲むこと。同じアル中とはいえ、酒量では日本人は勝てそうにない。

国産では、原察(りょう)の、探偵沢崎シリーズがいい。ただ、アル中は主人公の沢崎ではなく、元相棒。シリーズ中、現れるのはほんのわずか。アル中作家、風間一輝の作品も見逃せない。風間氏は「地図にない街」をはじめ、アル中が主人公の作品を何編かと、冒険小説を何作か残して、(おそらくは)酒がもとで亡くなった。東直己の「探偵はバーにいる」からはじまる連作。おもしろいけど、アル中本としては「そりゃないでしょう」ということになってしまい、残念だ。また、納得いかないアル中本ナンバーワンは、藤原伊織「テロリストのパラソル」。このあたりは、機会をあらためて。

日本でアル中探偵が活躍できないのはなぜか

それは「なぜアル中になったのか」という理由に引きずられているから。悲劇的な出来事による心の傷からアル中になった、という描かれ方ばかり。しかもその出来事は、同情せざるを得ないようなこと、とされる。もっとも多いのは「妻子を亡くす」パターンだ。

それに対し、アメリカやイギリスのアル中探偵の場合、原因はともかく、とどのつまりはその人物の個人の問題として描かれることが多い。「アル中である個人」が主役だから、マット・スカダーのように、息の長いキャラクターも出現する。幅と厚みがあるバラエティに富んだ物語を作りだすこともできる。

それはこれからのお楽しみ

私たちアル中が、飲まない生き方を求めて己を語りはじめれば、そこにドラマが生まれる。魅力的なアル中が描かれない日本の探偵小説だけれども、まずは、例会に行こうか。

・・・それにしても、誰か、書いてくれないかなあ、国産アル中探偵小説の傑作。

(参考・・・オール・アル中本)

「深夜プラス1」 ギャビン・ライアル著 ハヤカワ文庫

「長いお別れ」 レイモンド・チャンドラー著 ハヤカワ文庫

「酔いどれ探偵街に行く」 カート・キャノン著 ハヤカワ文庫

「酔いどれの誇り」「さらば甘き口づけ」 ジェイムズ・クラムリー著 ハヤカワ文庫

「そして夜は甦る」 原奈著 ハヤカワ文庫

「探偵はバーにいる」 東直己著 ハヤカワ文庫

「地図にない街」 風間一輝著 早川書房

「テロリストの parasol」 藤原伊織著 講談社文庫



酔いざめ川柳

須之内美奈子

【春】スカートも 押さえなくなり 春一番

なぜかしら おそろおそろ聴く 恋の歌

【夏】薫風に 吹かれて気分は トムコリンズ

袖なしも ショートパンツも ミニスカもない 衣替え

【秋】栗くりに梨なし 芋いもに 秋刀魚さんまの 秋きたり

肴さかなみな 飯にも合うこと 覚えて八段

飲めそうな 顔と言われて 舌を巻き

【冬】今日 冬至(とうじ) 夏至(げし)にも いたはず 例会場

木枯らしの 吹きて 例会 暖かき

体内じゃ 肝臓ヒマだと 不思議がり

「アル中本」を読もう！

二〇〇七年新春 アル中手記本の不覚 ～アル中、いかに生きるべきか～

(今回のアル中本)

「アル中地獄(クライシス) アルコール依存症の不思議なデフォルメ世界(増補)」

邦山照彦著 第三書館

「描きかけの油絵」 池田倫子著 東峰書房

世に数多くの手記あれど、アルコール依存症者の手記というのはあまりない。今回はその貴重な 2 冊をとりあげた。いざ。

「アル中地獄(クライシス) アルコール依存症の不思議なデフォルメ世界(増補)」

筆者、邦山照彦氏の人生は順調にすべりだした。二十代前半で仕事での成功を手にし、望んだとおりの家庭も得た。ところが三十歳を過ぎた頃から大好きだった酒が彼を打ちのめしはじめる。三十四歳で初めて精神病院へ入院。四十三歳で断酒に踏み切るまでに三十六回の入退院をくりかえした。その後も何度か再飲酒し、五十三歳で三十七回目の入院を最後に、今は飲酒のコントロールができるようになり毎晩一合か二合の「勝利の美酒」に酔っているとのこと。

「描きかけの油絵」

著者、池田倫子さんは二十一歳の学生時代にアルコール依存症と診断され、十七年もの間、酒害に苦しんだ。その後、断酒会に入会して断酒生活に入る。本書は断酒して七年後にそれまで少しずつ書きためた手記をまとめて発行したもの。しかし終章、本書の発刊にむけて準備が進んでいたときに、再飲酒してしまったことが告白されている。

アル中手記本の不覚

著者がそれぞれに手記を書いたあと飲酒しているところに注目したい。まったくの不覚であろう。もっとも不覚の内容は両著者によってかなり異なる。邦山氏の不覚は「アル中を克服した」と明言し、「自分の飲酒をコントロールできると錯覚している」こと。ご本人は“私はこの本を誰よりも、現在アルコール依存症と闘っているアル中同志諸君と、その家族の人たちのために書いた”としている。しかし最終的にアルコール依存症についての認識が間違っているため、ご本人の意図とは反対に「アル中同志諸君」にとってもその家族にとっても役に立つどころか有害にすらなりかねない。アルコール依存症は不治の病であり、回復の大前提は断酒を続けることだ。ここに命がかかっているのである。しばらくは節酒できても、いずれ必ずできなくなる。できなくなる前に寿命がきて死ぬ場合もあるだろうが、それは決して病気を克服したことにはならない。回復とは正反対の生き方だ。

とはいえこの本、魅力もある。邦山氏の酒害にまつわる体験談の部分。とくに彼の体験した幻視の描写が印象的だ。これだけすさまじい幻視というものがあるのか。邦山氏は写真撮影の腕前が相当なもので、

写真展で何度も入賞をはたしている。視覚の能力が優れていることが、幻視に影響するのだろうか。また、酒がやめられない苦しみ、続々と押し寄せるトラブルなどの体験も心を打つ。おそらく邦山氏自身の能力の高さや強い個性があらわれているのだと思う。断酒にふみきってから記述も説得力があつてとてもよい。体験談としては1冊の本にする価値が充分にある。だから余計に最後のどんでん返しが悔やまれるのだ。

さて池田氏のほうはどうか。彼女はとても優秀で真面目な方であり、酒害体験も正直で内省も深い。書中すべての体験談に共感することができた。ただ同じアルコール依存症者として掘り下げてほしかったのは、七年間の断酒生活を経て再飲酒したところでの自身についての振り返り。ここが聞きたかった。もっとも終章は再飲酒して間もないころ書かれたものであり、池田氏も振り返るためには時間を必要とするのだろうと思う。彼女がとった断酒への取りくみ方は間違えていない。けれども優秀で環境にも恵まれており、断酒にもきちんととりくんだ彼女でさえ、七年も続いた断酒のあと再飲酒してしまったのだ。これは「断酒後、どうやって生きていったらよいのか」という大きな問題を提起しているように思える。

飲まないだけではダメらしい

「飲まないで生きていくためには、飲まないだけではダメである」—— 飲まない生活がはじめてから五年過ぎた今、そう確信している。一日断酒の生活がはじめてしばらくは、喜びでいっぱいだった。飲まないことだけを目標にして生きられた。問題はその後だ。人生はマツタなしで続くから、酒なしでいろいろな試練と向き合わなければならない。それもしんどい。けれども本当の試練は、自分の内側からやってくる。飲まなくなったことでそれまで向き合うことのなかった自分自身の問題が吹き出してくるのだ。私自身も、高波のようにやってくる苦しさ、「生きづらさ」というのだろうか。そういったものにずいぶん悩まされた。例えば自己嫌悪。例えば取っても取っても取れない怒りの感情。行き詰まる、生き詰まる、息が詰まるような、あの感じ。内側からやってくる問題は人によってさまざまであるにせよ、避けられないのではないだろうか。

アル中、いかに生きるべきか

さて断酒会には断酒道というものがある。AAにはプログラムがある。どちらも取り組むにあたり「生き方を変える」決意を促(うなが)される。酒を止めるだけでいいとは決してうたっていない。アルコール依存症からの回復は、すなわち新しい生き方をめざすことなのだ。この二つは不可分だ。新しい生き方なしには酒害からの真の回復はありえない。アル中、いかに生きるべきか。新しい生き方って何だ？ 回復中の依存症者の数だけ答えがあるだろう。私は、こんな風に考えるようになった。

飲まずに生きるには自分に厳しくなければいけない。でも我慢だけの断酒は続かない。幸福感と充足感がなければ、自分にとって本当の幸せとは何であるのか。飲んでいるときにはついぞ分からなかった。今考えてみると、飲み始める前にも分かっていたのである。自分を甘やかさず、かつ、自分をいとおしむ。一日二十四時間三百六十五日、いつもこのことを忘れない。新しい生き方を実現するには修練が必要なのだと思う。もうひとつ、アル中のやるべきこと。それは仲間とともに、酒で苦しんでいる人の手助けをすることである。なぜならそれが、自分の経験をもっとも活かすことができる道だから。アル中いかに生きるべきか。新たな「アル中手記」がでてくることを心待ちにしている。

「アル中本」を読もう！

二〇〇八年新春 スペシャル 彼の底つき ～酔いがさめたら、うちに帰ろう～

(今回のアル中本)

「酔いがさめたら、うちに帰ろう」 鴨志田穰著 スターツ出版

「アジアパー伝」シリーズ 西原理恵子、鴨志田穰著 講談社文庫

「毎日かあさん」各編 西原理恵子著 毎日新聞社

底つきはアル中最大のドラマ

私は自助グループで語られる仲間の体験談が好きだ。初めて仲間の話を聞いた会場ですっかりハマった。六年が過ぎた今でもそれは少しも変わらない。ずっと仲間の話を聞き続けたいと思う。理由は「効く」からだ。体験談の内容が貴重であることはいうまでもない。だが、それ以上にひとりの語り手と多数の聞き手の間に言葉を超えた何か飛び交うことが多々あり、それが効く。何に効くかといえば、死ぬまで酒を飲む病気である私の魂に効くのだ。効いて、今日一日だけ飲まずに生きる力を与えられる。

体験談の要^{かなめ}は自分のことを自分の言葉で語ることにあるが、自他にあたえる影響がいちばん大きいのは「底つき」の物語だろう。「底つき」の物語は、意図して語られるものではない。また、内容のすごさとは関係がない。ただあるときある仲間が「底をついた」ことをその場に居合わせる仲間全員が気づく。もちろん一度底をついたから必ず断酒につながるとはかぎらない。しかし底つきなしに回復はない。底つきはアル中最大のドラマなのだ。

酔いがさめたら、うちに帰ろう

今回のアル中本は、昨年三月二十日、四十二歳の若さで亡くなった一人のアル中による手記である。著者の名は、鴨志田穰^{かもしだゆたか}氏(通称:鴨ちゃん)。腎臓癌で余命一年を宣告され、この本を書いた。

彼は有名なアル中だった。というのも彼の妻は売れっ子漫画家、西原理恵子^{さいばりえこ}氏であり、その作品に「アル中の夫・鴨ちゃん」としてしばしば登場したからである。彼はひたすらはためいわくでハチャメチャであると同時に、愛すべき人物として描かれた。鴨ちゃんは一時期、戦場カメラマンとして活躍したが、結婚後は「アジアパー伝」をはじめとする妻との共著を何冊か出した。しかし妻の圧倒的な才能の影にかくれ、彼自身の文章は注目されなかった。確かにあまり面白くないのだ、鴨ちゃんの文章は。ところが彼の遺作を読んで驚いた。いい手記になっている。妻の漫画はひとコマも入っておらず、他の作家の文も入っていない。初めての、彼単独の著作だった。

彼の底つき

鴨ちゃんの文章がいきなり巧くなったわけではない。だが以前の彼の文章とは一線を画している。読者のことは意識せず、素人に徹したような書きっぷりで、フツと力の抜けたような彼の「語り」が聞き取れる。文体が大きく変わっているわけではない。変わったのは、書き手である鴨ちゃん自身だったのだろう。

私が感じたのは文字どおり彼の「酔いがさめた」ことだった。曇りがとれたような、すこん、と突き抜けたよう

なすっきりした感覚は、そう、^{シラフ}素面の感覚なのだろうと思う。「アジアパー伝」では、あまたのおもしろい(はずの)ネタが、鴨ちゃんの酔いのフィルターに通され、表現が曇っていた観がある。肉体的に酒が抜けただけでなく彼の魂からもまた、酒が抜けつつあったのではないだろうか。終章、癌の治療のため転院する彼は、アルコール病棟を退院する前日、急遽、体験談を発表することに決めた。その体験談の中に、私は彼の「底つき」と回復のはじまりを感じた。端的に現れているのが、彼が最初の就職先である焼き鳥屋を辞めたときの話だ。二年間も世話になった店主に辞める理由を言えず、嘘をついてしまった。彼はこう内省している。「何でとっさに大変な嘘をついたのか、今でも、ものすごく反省しています。僕の欠点です。平気で嘘をつけるのが。人として大変よろしくない、と思っています」

何の飾りもない率直な告白である。小学生のような言葉だが、私はこの一文を読んだとき胸にじわっとくるものがあった。彼は酒だけでなく、自身の在り方と生き方に底をつき、死を目の前にして回復の鍵を手にした。残念には違いないが、同じアル中として彼が回復への一步を踏み出した状態で生を終えられたことは本当に良かったと思う。

底つき体験から得られるもの

酒でも、自分の在り方でも、本当に底をついたときその先を生きるための力が「与えられる」。今日一日だけ、飲まないで生きる力が「与えられる」。その力は決して自分で得ることはできない。アルコール依存症とはそういう病気だ。与えられて、受けとるしかない。受けとるための条件はおそらく正直になることと謙虚であることだろう。それが腹に落ちてみると、正直に謙虚であろうとすればするほど、楽に、ポジティブに生きられることを私は実感している。もちろん正直さも謙虚さも持ち続けることはできず、のべつ不正直で傲慢になるのだが、それも当然。なにしろ不完全な人間の中でも選り抜きの不完全なアル中なのだから。気づくたびに引き返すしかない。

年頭の思い

さて、鴨ちゃんはアルコール病棟に入院中、癌で余命一年と宣告され、別居していた家族のもとに戻った。アルコール病棟から転院して癌との闘病生活に入ってから死を迎える間の話は、妻、西原氏の「毎日があさん 出戻り編」に短くも余すところなく描かれている。こちらもすばらしい作品だ。

いつも思うこと。早くアルコール依存症という病気が多くの方に正しく伝わってほしい。西原氏も鴨ちゃんと連れ添って何年もの間、アルコール依存症がどういう病気か知らなかった、と語っている。アルコール依存症は震えあがるような恐ろしい病気だ。その一方で、十分に回復可能な病気であり、回復を通して人間の本质とは何か、人間の尊厳とは何かをつきつけられるすばらしい病気である。誤解を招く言い方であろうが、私はそう言い切る。自助グループに深く関わった方になら、どなたにも共感していただけることと信じて。

編集後記

職場に送られてくる「新生 房総」の、「アル中本を読もう！」にはいつも感動していました。これは、多くの人に読まれるべき価値のある内容で、このまま埋もれさせてはもったいないと、ずっと思っていました。このセンターたよりによって、一人でも多くの方の目に留まれば本望です。(noma)